

『篁物語』 伝本考

－表記から見た－

中 村 一 夫

【キーワード】 篁物語 表記 漢字 本文 書陵部本 彰考館本 承空本

【要旨】

表記、とりわけ漢字の使用状況に注目し、彰考館甲本・彰考館乙本・書陵部本・承空本の本文と伝本のありようについて考察した。江戸期書写の彰考館甲・乙本および書陵部本は「兄弟関係にある」「ほぼ同一系統のテキスト」と考えられるため、本文そのものには大きな異同は確認できない。鎌倉期書写の承空本の本文もまた書陵部本と親子、あるいは書承関係があるとされるもので、本文はほとんど一致する。しかし、これら四本を表記のレベルで比較すると、しばしば異なる性質を見出だすことができる。文字を物語構築に奉仕する単なる記号ではなく、書写環境や成立の事情までも含み持つ表記情報として捉え直すことによって、伝本の性格や本文の相対的な関係性をうかがうことができるのではないか。

一 問題の所在

作者未詳の『篁物語』は平安中期から鎌倉初期の頃に成立したとされる作り物語である。平安初期に歌人・文人として才名の高かった小野篁を主人公とする。『篁日記』あるいは『小野篁集』とも称されるように、物語以外にも日記や私家集としても扱われてきた。現存する『篁物語』の伝本は、鎌倉時代後期に書写されたカタカナ書きの承空本『小野篁集』（冷泉家時雨亭文庫蔵）が最も古く、それとほぼ同一の本文を持つひらがな書きの宮内庁書陵部本（霊元天皇宸筆本）がある。さらに彰考館蔵の甲本（栞形本）と乙本（袋綴本、原本焼失）とが知られている。書陵部本と彰考館甲本・乙本はいずれも江戸初期の書写である。四つの伝本は本文の異同の少なさから、何らかの書承関係を想定することができるものの、なお検討すべき点が数多残されている。特に2002年に新資料として公開された承空本とこれまでの三本の関係をどのように捉え直すか、管見によれば、承空本を中心に据えた伝本研究は、資料紹介を旨とする平林（2007）と安部（2008）があるくらいで、『篁物語』の新しい伝本研究は緒に就いたばかりである。

本稿は、主に表記（とりわけ漢字の使用状況）から上記の四本の伝本の性質や相対的な関係性を考えようとするものである。加えて今後の考察の根拠とする基礎資料たるデータを提示し、現時点で指摘できる事実について報告することを主たる目的とする。

二 各伝本における漢字含有率

まず最初に『篁物語』の四本の伝本がどのような表記で記述されているかを確認する。具体的にはかなと漢字で記述されている本文が、いかなる割合で書き分けられているのかということ进行调查していく。知られるように、和文系の作品は原則としてほのかなのみで記述され、漢字は限定的に使用されるだけである。しかし、作品の書写された時代や環境、書写者の教養など、いくつかの要因から、諸伝本間で比較すると有意な差異が認められる。次の表1は、四本の伝本の本行本文において、かなと漢字がどれくらいの比率で使用されているかをまとめたものである。『篁物語』は内容面で第一部と第二部に分かれており、本稿ではそこに何らかの繋ぎ目があるのではないかと考え、全体の含有率とともに両部でも算出した。なお作品の長さを考慮し、より特徴がはっきりするように、小数点第二位までを掲出している。

【表1 各伝本における漢字含有率】

漢字使用率	彰考館甲本	彰考館乙本	書陵部本	承空本
第一部かな	94.91%	94.61%	93.07%	93.74%
第一部漢字	5.09%	5.39%	6.93%	6.26%
第二部かな	92.35%	92.26%	92.31%	93.17%
第二部漢字	7.65%	7.74%	7.69%	6.83%
全体かな	94.40%	94.14%	92.91%	93.62%
全体漢字	5.60%	5.86%	7.09%	6.38%

見られるように、物語全体では四本とも漢字含有率はそれほど高いものではない。いずれもかなの含有率が90%を大きく超えており、いかにも和文系の作品らしい表記となっている。

では、これらの数値は書写年代の観点から歴史的にはどのような位置付けとなるのであろうか。ここでは基準とすべく、かつて報告した『源氏物語』の諸伝本のそれを示し、『篁物語』の数値と比較する。中村(2014)で調査対象としたのは、大島本・陽明文庫本・保坂本・尾州家本・麦生本・阿里莫本・国冬本の七つの伝本で、合計が300帖となる。

【表2 源氏物語の伝本七本（300帖）における漢字含有率】

源氏物語	平均	最大	最小
全体	8.8%		
江戸	12.7%	15.0%	7.8%
室町	9.3%	15.5%	4.7%
鎌倉	6.2%	9.9%	2.8%

表2に各時代に書写された諸本における漢字含有率の平均値を示した。『源氏物語』には平安時代の伝本が現存しないため、鎌倉期以降に書写されたものが対象となる。紙幅の関係で全帖の値の一覧を示すことはしないが、古い時代から新しい時代へ、緩やかに漢字含有率の平均値が上昇していることがわかる。この数値に先の『篁物語』のものを照らし合わせると、およそ鎌倉から室町の頃のものに相当している。『篁物語』の彰考館甲本、同乙本、書陵部本は江戸初期に写されたものだと考えられているが、漢字含有率そのものはもっと古い時代の値に近くなっている。一方、鎌倉後期書写の承空本は、まさに同時代の源氏物語の写本の数値に近いものを有していた。これらの事実をいかに捉えればよいであろうか。

今西（2012）や斎藤（2012）、田村（2012）などによって、古写本と表記（特に漢字の使用）の関係がうかがうにあたって、重要な指摘がなされた。これらもまた主に『源氏物語』の写本調査から導き出されたものであるが、本稿とも深く関わるものである。今西（2012）以下の先行研究を踏まえ、中村（2015）では、その要点を箇条書きで示している。

- ・古い本は仮名が中心、新しい本は漢字をより使おうとする傾向がある。
- ・巻ごとの次は書写者ごとに調査する必要がある。
- ・鎌倉期に書写された伝本の漢字含有率は平均値を下回る。
- ・漢字含有率の高さは表記上の古態ではないことを示す。
- ・漢字含有率の高い伝本は、読み取りやすさを求める方向が認められる。
- ・漢字含有率の高い伝本は、基本的な和語や漢語に加え、指示語や人名、さらに拍数の多い和語にまで漢字を使用する。
- ・近世になって出現、多用される漢字がある。
- ・写本の表記に版本からの影響を確認することができる。

先学の驥尾に付して、これらの事実を鑑みると、次の諸点が指摘できる。

1) 江戸時代に書写された彰考館甲本・乙本、書陵部本の三本では、より多くの漢字を使用する書陵部本の方が読み取りやすさを求めていると見ることができる。ただし彰考館の両本の表記がよりオリジナルに近い（＝古い）という保証は

ない。

2) 彰考館甲本・同乙本・書陵部本は江戸時代初期の書写とされるが、漢字含有率を源氏物語の諸伝本と比較すると、鎌倉から室町の頃のそれに匹敵する。このことから、書写年代は比較的新しいものの、本文の表記そのものは古態を保っている可能性が高いと考えられる。

3) 2の事実は鎌倉後期に写されたと考えられる承空本の存在に根拠を求めることができるかもしれない。四本を比較すると、本文そのものには大きな異同がなく、ほぼ忠実に本文を受け継いでいるように見えるからである。しかしながら、文字（特に漢字）の運用という面ではそれなりの違いが認められ、直接の書承関係にあったとは考えにくい。

漢字含有率という数値からは以上のようなことが指摘できる。そして、物語の繋がりに唐突さを感じさせる第一部と第二部の表記に関しても、この作品の成立に関わってくる注目すべき点がある。

4) 第一部と第二部では漢字含有率に変化が見られる。特に彰考館甲本・乙本で含有率が大きく上昇する。物語の内容面での繋がりの不自然さとも関係するが、本来は書写環境の異なっていた別々の伝本が接合されたのではないか。このことは、両部に現れる漢字の種類の違いや使用法からもうかがうことができる。一方、承空本では両部の漢字使用率に大きな変化は見られない。

『篁物語』の成立については諸説がある。近年刊行された『日本語大辞典 下巻』（2014年）収載の同物語の項目には、安部（1996）が日本語学の見地から検証した解釈、すなわち「主要部分が原『篁物語』として九〇〇年代後半に成立し、一方、現存『篁』には中古末期以降の何らかの手が入っていることが考慮され、その時代的重層性が語彙語法の偏りと内容的混質となっている」とするのが最も有力であると記されている。他にも日本語学の立場からのものとして、遠藤（1964）では使用される語彙の分析から第一部の古態性を指摘しているし、また金水（1983）では動詞ヲリの用法を分析し、「明らかに平安第一期（稿者注：蜻蛉日記・宇津保物語以前）の特徴を示している」とした。ここで検討している漢字含有率からだけでは内容面までの成立事情をうかがうことはできないが、複数の段階を経て今日の姿となっていることの傍証とはなりえるだろう。

三 使用される漢字の実際

前節では各伝本の漢字含有率から本文の時代的特性および諸本の相対的な関係性をうかがったが、続いてそれぞれの伝本がどのような漢字を使用しているかについて、考察を加えることとする。まずは次に示す表3を見られたい。これは四本の伝本に使用される漢字の異なり数(種類)をまとめたものである。第一部と第二部で共通する漢字があるので、全体の総数は両部の単純な足し算とはならない。

【表3 各伝本における漢字の異なり数】

異なり数	彰考館甲本	彰考館乙本	書陵部本	承空本
第一部漢字	71	73	79	60
第二部漢字	30	30	35	26
全体漢字	81	83	89	64

全体として漢字含有率が最も高かった書陵部本が、やはり四本では最多の89種類の漢字を使用している。続いて彰考館の甲本・乙本、そしてこの中では最も古い書写本である承空本という順に少なくなっていく。江戸期に書写された三本と鎌倉期に書写された一本では明らかに数値が異なっている。先に記した「古い本は仮名が中心、新しい本は漢字をより使おうとする傾向がある」は、漢字の運用の面からも確認することができる。この漢字の種類が多寡も各伝本の成立年代や成立事情、相対的な関係性を考える手がかりの一つとなる。

次に示す表4は伝本相互の同質性と異質性を探るために、各伝本に使用される漢字がいかに他本と重なり合うか、あるいは重ならないかをまとめたものである。さらに表5は表4に掲出した漢字が各伝本でどれくらい使用されているか、その延べ使用数を対照する形で一覧にしたものである。

【表4 共通性と異質性】

伝本	使用する漢字	数
承・書・甲・乙	一・右・衛・火・願・給・君・経・月・見・言・御・昨・三・山・四・子・思・事・侍・時・七・尺・春・所・女・心・申・神・臣・身・人・世・大・地・中・程・殿・冬・道・二・廿・日・年・納・物・兵・返・法・又・木・夜	52
書・甲・乙	雲・家・河・国・車・夢・涙	7
承・書・甲	花	1
承・書	歌・我・婦・行・佐・使・色・水・丁・入	10
甲・乙	煙・王・華・学・契・後・語・今・宰・首・初・石・相・帳・堂・内・文・昧・名・几・屏	21
書・乙	成	1
承・乙	川	1
書	顔・橘・許・玉・空・出・消・上・瀬・千・霜・誰・男・鳥・銚・命・野・有	18
乙	浪	1

計 112

【表5 使用漢字一覧（四本対照）】

第一部

使用漢字	人	心	物	御	給	事	女	入	返	日	君	身	三	中	夜	思	家	月	見	七	地	程	又	火	花
甲使用数	37	4	4	12	17	1	11	0	3	8	8	5	7	5	6	2	0	4	6	4	1	3	1	1	1
乙使用数	37	4	4	12	18	1	11	0	3	8	7	7	7	5	7	2	0	4	13	4	2	3	1	1	0
書使用数	40	23	19	12	11	11	10	10	9	7	7	6	6	6	5	4	4	4	4	4	4	4	4	3	3
承使用数	40	24	21	12	9	11	11	10	14	9	8	7	6	5	6	6	0	3	1	4	3	5	5	3	3

昨	四	所	道	二	一	河	玉	行	山	使	子	時	車	色	神	世	夢	涙	雲	衛	歌	我	願	婦
2	4	2	1	3	3	2	0	0	3	0	1	1	1	0	4	1	4	3	1	1	0	0	1	0
2	4	2	1	3	3	1	0	0	3	0	1	1	1	0	4	1	4	3	1	1	0	0	1	0
3	3	3	3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1
3	3	3	1	3	2	0	0	2	2	1	2	2	0	2	2	2	0	0	0	1	1	1	1	1

橘	空	経	言	佐	尺	春	消	上	申	水	瀬	千	霜	大	誰	男	丁	鳥	冬	廿	年	納	兵	法
0	0	1	1	0	1	2	0	0	1	0	0	0	0	7	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1
0	0	1	1	0	1	2	0	0	1	0	0	0	0	7	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
0	0	1	1	1	1	1	0	0	1	1	0	0	0	1	0	0	1	0	1	1	1	1	1	1

鉢	命	木	野	語	川	学	石	煙	王	華	契	侍	首	初	帳	堂	内	文	味	几	屏	成	浪
0	0	1	0	2	0	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0
0	0	1	0	2	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1
1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

第二部

使用漢字	給	人	御	君	大	侍	心	三	事	殿	物	女	臣	二	日	入	一	右	家	我	顔	許	玉	国	時
甲使用数	19	11	6	5	6	0	0	4	0	2	0	0	2	0	3	0	0	1	1	0	0	0	0	1	1
乙使用数	19	11	6	5	6	0	1	4	0	2	0	0	2	0	3	0	0	1	1	0	0	0	0	1	1
書使用数	12	10	6	5	5	4	4	3	3	3	3	2	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1
承使用数	12	10	6	5	5	4	4	3	3	3	3	2	2	2	2	2	1	1	0	1	0	0	0	0	1

七	車	出	所	世	成	中	返	夜	有	見	文	学	後	今	宰	山	思	相	又	名
1	1	0	0	1	0	1	1	2	0	5	3	2	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	0	0	1	0	1	1	2	0	6	3	2	1	1	1	1	0	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1	0	0	1	1	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

まず表4、漢字の異なり数（種類）が全体で112種あるところ、四本の伝本で共通に使用されるものは52が数えられる。鎌倉期に書写された承空本も使用しているものであり、成立当初から使われているとまで言い得るかはともかく、比較的早い時期から定着していたものだと考えられる。ただし表5の対照表を見ると、使用数にはばらつきがあり、必ずしも四本で共通に使用される漢字が同じように現れているわけではないことがわかる。本文の質とともに書承関係を精査しなければならないのは言うまでもない。たとえば、「心」「物」「事」「返」などは

いずれの伝本でも使用されているが、彰考館の両本と書陵部本・承空本では使用数に極端な差が認められる。特に書写年代が古い承空本の方（および本文の類似性の高い書陵部本）により多くの使用が認められることには注意させられる。逆に「大」「見」などは彰考館甲本・乙本に使用が偏っており、表記の面からこの四本の伝本は二群に分けて考えることができる。このことは双方の群の書写事情を鑑みても齟齬のない見方であろう。

今一度、表4に戻る。彰考館乙本は同甲本の転写本であるから、用字法が近いのは当然のことと思われるが、それでも極一部で違う表記（成・河・浪）が使用されている。特にいわゆるミ語法「おほつか浪」に当てた「浪」は、一例だけとはいえ、他にないだけに目立つものである。そして甲本と乙本の両本で共通に使用されるものが21例あり、他方書陵部本のみで使用されるものが18例あり、書写年代の違う承空本はひとまず措くことにしても、二群の対立がここでも鮮明に現れている。

また加えてもう一点注意されることは、第一部と第二部で使用傾向に変化が見られることである。たとえば「給」は主に尊敬語「たまふ」や「のたまふ」を記述するために使われるが、使用数だけ見ると、全編を通して高い数値を示しているように映る。しかし、彰考館の両本では、第一部に漢字使用が集中し、第二部になるとかな書きが多用されるという変化が確認できる。先に彰考館の両本に使用が偏るとした「大」も、第一部だけ見れば確かにそうであるが、第二部となると書陵部本、承空本ともにほぼ匹敵する使用数となっている。「又」は第一部では承空本の群がよく使用しているのに、第二部ではまったく使われることがなく、彰考館本の群のみで使用されている。

慎重に考えるべき問題ではあるが、先に指摘した第一部と第二部の不自然な接合を証する一例と言えるのではないだろうか。個別の用例のさらなる精査が求められる。

四 表記とことば

ここまで四本の伝本の漢字含有率、使用される漢字の種類、さらに伝本相互の同質性、異質性を見てきた。本節では、これらの漢字がいかなる語に使用されているかを、対照表の形で示すことにする。次の表6がそれである。表の中央部に使用された漢字を置き、その右側に実際の用例（語）を写本の表記のまま配している。左側には伝本を並べて、右の用例を持つものには丸印（○）が付してある。個別の使用数自体は一部を除き大きな数値にはならないので、今回は存在するかしないかだけがわかるように作表した。たとえば「一」の部では「一尺」「一人」は四本ともに見られるが、「一日」は承空本と書陵部本にしかないということである。丸印の配列からは両群の同質性と異質性をより具体的にかつ視覚的に掴む

ことができると思われる。

続く表7は漢字で表記される語を品詞別に集計したものである。どの伝本でも名詞を漢字で表記することが圧倒的である点は共通するものの、それ以外の品詞への漢字使用の広がりには両群で相当の違いを見せている。すなわち承空本や書陵部本では動詞や形容動詞、形容動詞、助詞など、かなり幅広く漢字で記述されているのであった。同時代の他の伝本の表記などとも比較しながら、性質なり原因なりを考える必要があると思われる。今は事実を指摘するのみで留め、表6および表7についての詳細な考察は向後に譲ることにしたい。

【表6 漢字で表記される語 諸本対照】

彰甲	彰乙	書陵	承空	漢字	用例	品詞											
○	○	○	○	一	一尺	名			○	○	三	三の君	名				
○	○	○	○	一	一人	名					三	三君	名				
			○	一	一日	名					三	三日	名				
○	○			一	一首	名					三	三昧堂	名				
○	○	○	○	右	右大臣	名					山	山	名				
○	○	○	○	衛	兵衛	名				○	○	山	いもせの山	名			
○	○	○	○	火	火	名				○	○	山	いもせ山	名			
○	○	○	○	願	願	名				○	○	四	三四人	名			
○	○	○	○	給	給ふ(四段)	動				○	○	四	三四日	名			
○	○	○	○	給	の給ふ	動				○	○	四	四七日	名			
○	○			給	うけ給はる	動				○	○	子	子	名			
○	○	○	○	君	君	名						思	思ふ	動			
○	○	○	○	君	大君	名						思	思ひ出づ	動			
		○	○	君	中の君	名					○	○	思	思ひ知る	動		
○	○			君	中君	名						○	○	思	思ひ嘆く	動	
		○	○	君	三の君	名					○	○	思	思ひをり	動		
○	○			君	三君	名						○	○	事	事	名	
		○	○	経	法花経	名						○	○	事	ひか事	名	
○	○			経	法華経	名						○	○	事	なに事	名	
○	○	○	○	月	月	名					○	○	事	返事	名		
○	○	○	○	月	月夜	名						○	○	侍	侍り	動	
○	○	○	○	見	見る	動					○	○	侍	内侍	名		
○	○			見	見ゆ	動						○	○	時	時	名	
		○		見	見す	動						○	○	時	時／＼	副	
○	○	○		見	見つく	動					○	○	七	七日	名		
○	○			見	かいま見	名						○	○	七	三七日	名	
○	○	○	○	言	大納言	名							七	四七日	名		
○	○	○	○	御	御	接頭						○	○	尺	～尺	接尾	
○	○	○	○	昨	昨日	名						○	○	春	春	名	
○	○	○	○	三	三人	名						○	○	所	所	名	
○	○	○	○	三	三四人	名						○	○	所	二所	名	
○	○	○	○	三	三四日	名					○	○	女	女(をんな)	名		
○	○	○	○	三	三四日	名						○	○	女	女(むすめ)	名	
○	○	○	○	三	三七日	名					○	○	心	心	名		
○	○	○	○	三	二三	名						○	○	心	心地	名	
○	○	○	○	三	三年	名					○	○	心	心ち	名		

		○	○	心	心み	名
		○	○	心	心きも	名
		○	○	心	心つかひ	名
		○	○	心	心ゆく	動
		○	○	心	心うし	形
○	○	○	○	申	申す	動
○	○	○	○	神	神	名
○	○			神	石神	名
		○	○	臣	大臣	名
○	○	○	○	臣	右大臣	名
○	○			臣	大臣殿	名
○	○	○	○	身	身	名
○	○	○	○	人	人	名
○	○	○	○	人	人／＼	名
○	○	○	○	人	人き、	名
○	○	○	○	人	むかし人	名
○	○	○	○	人	人にくし	形
○	○	○	○	人	～人	接尾
		○	○	世	世	名
		○	○	世	世中	名
○	○			世	世の中	名
		○	○	世	のちの世	名
○	○			世	後世	名
○	○	○	○	大	大かく	名
○	○			大	大学	名
		○	○	大	大臣	名
○	○			大	大臣殿	名
○	○	○	○	大	右大臣	名
○	○	○	○	大	大納言	名
○	○	○	○	大	大君	名
		○	○	大	大殿	名
○	○			大	大王	名
○	○			大	大し	名
		○	○	地	心地	名
○	○	○		地	こ、地	名
○	○	○	○	中	中	名
○	○	○		中	道中	名
			○	中	みち中	名
○	○	○	○	中	中／＼	名
		○	○	中	世中	名
○	○			中	世の中	名
		○	○	中	中の君	名
○	○			中	中君	名
○	○	○	○	程	程	名
		○	○	殿	殿	名
		○	○	殿	大殿	名
○	○			殿	大臣殿	名
○	○			殿	しむ殿	名
○	○	○	○	冬	冬	名
		○	○	道	道	名

○	○	○		道	道中	名
				道	道あひ人	名
○	○	○	○	二	二三	名
○	○	○	○	二	二人	名
		○	○	二	二所	名
		○	○	二	二なし	形
○	○	○	○	廿	廿	名
○	○	○	○	日	日	名
○	○	○	○	日	～日	接尾
○	○	○	○	日	昨日	名
○	○	○	○	年	～年	接尾
○	○	○	○	納	大納言	名
○	○	○	○	物	物	名
		○	○	物	物し	形
		○	○	物	物を	名
			○	物	うす物	名
		○	○	物	すき物	名
		○	○	物	物わすれ	名
		○	○	物	物さはかし	形
○	○			物	物語	名
○	○	○	○	物	物かたり	名
○	○	○	○	兵	兵衛	名
		○	○	返	返し	名
○	○	○	○	返	返事	名
○	○	○	○	返	返る	動
		○	○	返	返ふ	動
		○	○	返	つくり返ふ	動
○	○	○	○	返	返	名
		○	○	法	法花経	名
○	○			法	法華経	名
○	○	○	○	又	又	副
		○	○	木	木丁	名
○	○			木	木さき	名
○	○	○	○	夜	夜	名
○	○	○	○	夜	月夜	名
○	○	○	○	夜	夜へ	名
○	○	○	○	夜	夜ふかし	形
○	○			夜	夜かれ	名
		○	○	花	法花経	名
○		○	○	花	花たちはな	名
		○		花	花橘	名
○	○			語	物語	名
		○	○	歌	歌	名
		○	○	我	我	代
		○	○	帰	帰る	動
		○	○	行	行く	動
		○	○	佐	(兵衛) 佐	名
		○	○	使	使	名
		○	○	色	さくら色	名
		○	○	色	色々	名

		○	○	水	水	名	○	○			今	今	副
		○		瀬	ふち瀬	名	○	○			華	法華経	名
		○	○	丁	木丁	名	○	○			石	石神	名
		○	○	入	入る(四段)	動	○	○			相	宰相	名
		○	○	入	入る(下二段)	動	○	○			王	大王	名
		○	○	入	とり入る	動	○	○			煙	煙	名
		○	○	入	かき入る	動	○	○			味	三味堂	名
		○		野	よし野	名	○	○			文	文	名
			○	川	いもせ川	名	○	○			文	文まき	名
	○			川	よしの、川	名	○	○			後	後世	名
		○		鳥	千鳥	名	○	○			帳	几帳	名
		○		顔	えたり顔	名	○	○			屏	屏	名
		○		霜	霜	助	○	○			宰	宰相	名
		○		銚	玉銚	名	○	○			学	大学	名
		○		許	許	助	○	○			契	契	名
		○		空	空なり	形動	○	○			堂	三味堂	名
		○		玉	玉銚	名	○	○			名	名	名
		○		玉	玉しゐ	名	○	○			初	初	名
		○		消	消ゆ	動	○	○			几	几帳	名
		○		橘	花橘	名	○	○			内	内侍	名
		○		有	有	動	○	○	○		雲	うき雲	名
		○		命	命	名	○	○	○		涙	涙	名
		○		千	千鳥	名	○	○	○		河	河	名
		○		出	出づ	動			○		河	いもせ河	名
		○		上	上	名	○	○	○		家	家	名
		○		男	男	名	○	○	○		夢	夢	名
		○		誰	誰	代	○	○	○		国	国	名
	○			浪	おほつか浪	形	○	○	○		車	車	名
	○			成	成	助動	○	○	○		車	かしは車・ かものは車	名
○	○			成	成る	動							
○	○			首	一首	接尾							

【表7 漢字で表記される語 品詞別】

品詞	全体	甲本	乙本	書陵	承空
名詞	181	121	123	128	105
動詞	28	12	10	24	19
形容詞	7	2	3	6	6
形容動詞	1	0	0	1	0
代名詞	2	0	0	2	1
副詞	3	2	2	2	2
助詞	2	0	0	2	0
助動詞	1	0	1	0	0
接頭語	1	1	1	1	1
接尾語	5	5	5	4	4
	231	143	145	170	138

五 結

本稿では、『篁物語』の新資料である承空本を含め、これまでこの作品の研究の中心にあった書陵部本、彰考館本甲本・乙本の性質や相対的な関係性を考えるべく、主に漢字使用の面から調査と考察を行ってきた。引き続き、日本語史上の事実を睨みながら、この作品の成立年代や本文研究を課題としていく。ここではその基礎となるデータや資料を提示し、その事実から考えられる解釈をいくつか指摘した。大方のご批正を賜れば幸いである。

主要参考文献

- 石原昭平・根本敬三・津本信博『篁物語新講』（1977年）
- 平林文雄・財団法人水府明德会編著『増補改訂小野篁集・篁物語の研究 影印・資料・翻刻・校本・対訳・研究・使用文字分析・総索引』（2001年）
- 財団法人冷泉家時雨亭文庫編『冷泉家時雨亭叢書 承空本私家集 上』（2002年）
- 安部清哉「『篁物語』承空本（『小野篁集』）に関する研究課題」（『人文』7号、2008年）
- 安部清哉「語彙・語法史から見る資料－『篁物語』の成立時期をめぐる－」（『国語学』184、1996年3月）
- 平林文雄「承空本片仮名書本『小野篁集』対校本」（『文学研究』vol.95、2007年4月）
- 久保木哲夫「解題」（『冷泉家時雨亭叢書 承空本私家集 上』2002年）
- 阿部好臣「篁物語（項目）」（『日本語研究事典』2007年）
- 安部清哉「篁物語（項目）」（『日本語大事典 下巻』2014年）
- 今西祐一郎「『表記情報学』事始め」（『日本古典籍における【表記情報学】の基盤構築に関する研究Ⅰ』2012年2月）
- 斎藤達哉「仮名文の文字調査－源氏物語花散里68本の仮名字母と漢字－」（『専修国文』91号、2012年9月）
- 田村隆「『涙』の表記情報」（『国語国文』2012年2月）
- 遠藤嘉基「篁物語攷」（『国語国文』1958年11月）
- 金水敏「上代・中古のキルとヲリ－状態化形式の推移－」（『国語学』134、1983年9月）
- 中村一夫「仮名文テキストの文字遺－鎌倉から江戸の源氏物語を通覧する－」（『日本古典籍における【表記情報学】の基盤構築に関する研究Ⅱ』2014年2月）
- 中村一夫「別本研究の現在／今後」（『新時代への源氏学 7 複数化する源氏物語』2015年）